

常三島遺跡(総合科学部3号館)の発掘調査

埋蔵文化財調査室室長

定森秀夫

埋蔵文化財調査室は、総合科学部3号館改修に伴う埋蔵文化財発掘調査を02年7月29日から10月31日まで実施した。当該地は常三島遺跡と命名されている。江戸時代の徳島城下町遺跡であり、中下級武士の武家屋敷地となっていた。常三島遺跡では、これまで工学部での発掘調査がほとんどであった。総合科学部での



写真1 屋敷境溝(瓦が多量に出土した溝 S39の実測、東より)

発掘調査は今回が初めてである。調査地点は3号館中庭東側の増築

部分である。「安政年間(1854~1860)御山下島分絵図」では、調査区の北側が福家兵太兵衛宅、南側が佐和勇之進宅となっていて、この両武家屋敷の屋敷境溝が東西に走ることが予想された。想定通り屋敷境溝が検出されたが、溝は位置を変えたり重複したりしていて、計12条検出された(写真1)。このことから、江戸時代を通して屋敷境溝が何度も造り変えられたり、浚渫されたりしていたと考えられる。写真1に見られる瓦を多量に出土した溝 S39は、屋敷境溝の中では特異であり、何らかの理由で瓦を多量に廃棄せざるを得なかったと思われる。当然、建物の倒壊などの理由が考えられるが、とりあえず判断を保留している。溝の切り合い関係の他に、今後の整理作業で出土遺物の時期を確定し、これら屋敷境溝の時期別変遷を明らかにしていきたい。

溝以外の遺構としては、井戸、廃棄土坑などを確認した。井戸は1基

検出された。直径1.4mの円形掘り方で、底に直径40cmの桶を設置している。桶上20cmの位置に、青石が1段巡らされているのを確認することができた。湧水が甚だしく、井戸底まで調査はできなかったが、内部から陶磁器の他に曲物底などの木製品が出土した(写真2)。



写真2 井戸(半載した状況、東より)

幕末頃の廃棄土坑からは多量の陶磁器・瓦などが出土した。そのほとんどは破片であるが、完形品も数点出土している。写真3の右は、大谷焼の徳利であり、「福嶋」の字が刻み込まれている。刻銘の徳利は酒屋の貸し容器で、「福嶋」の酒屋からこの徳利に酒を入れて持ってくるのである。

大谷焼は、現在も鳴門市で作られている焼物である。写真3の左は備前

焼の徳利で、これで熱燗を飲んでいたのである。江戸時代も酒好きは多かったようで、徳島城下町遺跡からは酒徳利が必ず出土する。徳利の出土を見るにつけ、酒好きはいつの世にもいるものと納得してしまう。



写真3 幕末廃棄土坑出土の徳利(右:「福嶋」銘大谷焼、左:備前焼)

今回の調査は、改修工事との同時併行の作業で、騒音・ほこりの中、全員常時ヘルメット着用での発掘調査となった。夏の間は、体から塩を噴くような暑い日が続いた。また雨の日も多く、調査地点がプール状に水浸しに遭ったこともあり、その度に泥まみれになりながら排水を行った。発掘調査に関わった全員の協力で、10月に入っては土日も作業を行って、何とか終了予定日まで調査のすべてを終えることができた。